太宰府人物志

資料室だより⑳

田中朝臣三上

天平4（732）年頃、田中朝臣三上は大宰少監に任命されました。彼はその大宰府赴任途上で従者3人とともに播磨国（現兵庫県西南部）を通過したことが当時の公文書に記されています（天平4年以前播磨国郡稲帳）。時に正六位上でした。その後の三上については、天平8（736）年正月に外従五位下を授けられたこと、同10年4月に肥後守に任命されたこと（いずれも続日本紀）が知られるほかは、記録が残されていません。

しかしこの人物に関わるか、と推定される資料が発見されました。昭和61（1986）年、大宰府政庁南側の不丁地区における発掘調査で出土した一枚の木簡がそれです。この木簡には「為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随大監正六上田中朝□□」と記されています。「筑前・筑後・肥等の国に班給せんが為に基肄城の稲穀を遣わして大監正六上田中朝□□に随わしむ」と一応読むことができます。つまり大宰大監田中朝臣某に基肄城に蓄積されていた稲穀を筑前・筑後・肥等の国に班給させる、という内容でしょう。木簡には欠損もなく、完形と考えられるのですが、なぜか朝という文字の途中から下の部分が二次的に削り取られており、この人物の名前が分からなくなっています。九州歴史資料館におられた故倉住靖彦さんは、この基肄城の稲穀班給を天平7（735）年の天然痘流行と関連づけるとともに、ひとつの憶測としてこの田中朝臣某が三上である可能性を指摘されています。たしかに、この木簡が出土した溝SD2340が機能していたのは、養老～天平年間を中心とするころと推定されますので時期的にも符合しますし、また正六位上という位階も一致しています。確証はないものの同一人物である蓋然性は大きいと思います。

とすれば、両者の唯一の相違は官職です。三上は播磨国郡稲帳では大宰少監ですが、木簡には大宰大監として登場します。三上は大宰府在勤中に少監から大監へと昇進し、その後さらに肥後守へと転任したと考えられるのではないでしょうか。こうした府内・管内における人事異動も大宰府の管内支配を考えるうえでは、重要な課題だといえます。

市史資料室　重松　敏彦